

2018年度
第1号

医学教育センターニュース



編集・発行 愛知医科大学医学教育センター ～ Jun. 2018 ～

◆医学教育分野別評価受審について

↓ 分野別評価推進委員会の様子

2年前から多くの先生方のご協力のもと、医学教育分野別評価の受審に向けての準備が着々と進んできております。ご承知のごとく、平成22年に米国のECFMGからの通告があり、医学教育の国際基準をクリアした医科大学の卒業生でなければ、米国での臨床研修を行うことができなくなりました。これを受け、わが国では日本医学教育評価機構（JACME）が創設され、この組織が全国すべての医科大学の医学教育の内容を評価点検しているわけです。



これまでに既に多くの医科大学が受審を終えてきておりますが、本学では平成31年9月2日～9月6日に受審を受けることの決定が、先日、JACMEより通知されました。実際には、現在作成していただいている自己点検評価書を平成31年5月にJACMEに送付しなければなりませんので、書類完成まで1年を切ったわけです。

膨大な書類を作成しながら、求められる基準に合うよう本学の医学教育の内容を改善していく必要があります。2年前から大きく進められている医学教育改革はこれに基づくものです。教員の先生方には多大なご協力をいただいているところでございますが、求められる基準は、現在本学で実施できている教育内容よりもさらに高いものであり、教育改革はまだまだ道半ば、もしかするとまだ3合目あたりといってもよい状況かもしれません。

分野別評価受審の実質的な利益は前述しましたように卒業生の米国での臨床研修の資格獲得ですが、実際には、受審を契機として実際に行われている自大学の医学教育を自分たちで見直してPDCAのサイクルをまわし整備をすることが大きな目的です。そのことで、グローバル化の進む医学界で十分に活躍できる医師を育成すること、社会構造、疾病構造が大きく変わりつつある我が国の将来の医療に責任をもって当たることのできる医師を育成すること、が最終目的といってもよいのではないかと思います。

社会で最善の評価を得られる卒業生を輩出できるよう、引き続き本学の医学教育改革へのご協力をどうかよろしくお願い申し上げます。

医学教育センター 副センター長
地域医療教育学寄附講座 教授（特任）
医学教育分野別評価推進委員会 委員
宮田 靖志

◆OSCE の現状と今後

本邦の医学教育における臨床実習に関して、「見学型」から「診療参加型」への転換が長らく求められています。本学も来年度受審予定の分野別認証に関連して、国際評価に耐えうるようにと、「診療参加型」への流れは一層強くなっています。「診療参加型」実習を進めるにあたって、医学生が実際の診療に参加するには、その学生が基本的医学知識と臨床技能を修得していることを社会に説明する必要があります。このような国民のニーズに応えるために、共用試験は実施されるようになりました。共用試験は、2005年12月より実施され、知識を評価する試験（Computer Based Testing: CBT）と、臨床技能と態度を評価する客観的臨床能力試験（Objective Structured Clinical Examination: OSCE）からなっており、既に10年以上の歴史があります。

また臨床実習後に実施する Post CC OSCE（臨床実習後 OSCE : Post clinical clerkship OSCE, 昔は Advanced OSCE と呼んでいました）の果たす役割も、臨床実習の充実と共にますます増えてきています。この Post CC OSCE は、2020 年に共用試験として導入される予定です。将来的に共用試験は 4 年生（CBT と OSCE）と 6 年生（OSCE）で実施され、OSCE に関しては、実習前と実習後に行われることになります。本学では、臨床実習前 OSCE を「Pre CC OSCE」、実習後 OSCE を「Post CC OSCE」と呼ぶこととしました（略すると両者とも PCC OSCE となってしまいます）。

本学は、2017 年度より Post CC OSCE のトライアルに参加し、正式実施に向けて準備を始めています。Post CC OSCE は、単に診察手技の確認試験を行うのでは無く、医療面接で得られた情報を元に身体診察を行い、鑑別診断などの臨床推論を行うという試験になります。正式実施時には、共用試験実施評価機構からの提供される課題 3 つに加え、複数の大学独自課題を実施することが求められているため、本年度は 5 ステーションで Post CC OSCE を実施する予定です。

この試験が共用試験になるという意図は、医学部卒業後研修医として仕事する一日目（卒業時）に、医師として医療面接を含めた基本的診療手技、鑑別診断ができることを求めているということです。この方針は、現行の医師国家試験は知識のみを問う試験で有り、手技に関する試験が無いと長らく指摘されていることに対する対応策であり、今後の Post CC OSCE の重要性・臨床実習の重要性は益々増していくと思われます。ステーション数の増加に伴い教員の負担も増加しますが、ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

医学教育センター 副センター長
教授（特任） 早稲田 勝久

◆授業への取り組み

平成 30 年度新入生合宿研修（プロフェッショナリズム 1a）の開催について

4月5日（木曜日）・6日（金曜日）両日にかけて、新入生合宿研修が三河湾リゾートリンクス（愛知県西尾市吉良町）にて例年通りに「プロフェッショナリズム 1a」科目として開催されました。入学式（4月3日）の後、まだ新入生同士もあまり交流が無いなか、また期待のみならず不安も多々ある状況で、学生間のコミュニケーションを図ること、医学生としての自覚を高め、学修意欲を刺激することを目的に進められています。新入生諸君には早速に、本学のコンピテンスでもある“プロフェッショナリズム”および“コミュニケーション”を意識してもらう機会ともなりました。



教員側は学長、理事長と医学部長にもご講演頂くとともに、医学部長はじめ12名の先生方には2日間通して

のご参加を得ました。学生にはコミュニケーションの取り方から始め、さらにゲーム形式も取り入れて同じメンバーで纏まってしまいうことなく出来る限り多くの学生間で接する機会を設け、意見交換を奨めるとともに今後への抱負・意欲を表明してもらいました。学長からは医学部教育の現状を、理事長からは愛知医大の歴史と期待をお話頂き、さらには若槻医学部長はじめ石橋教務部長、奥村教授などから臨床系のお話もあり学生は興味を持って拝聴していました。本学の先輩として医学教育センターの青木講師・早稲田教授(特任)からの経験談なども、学生にとって非常に意義深いものだったと思われます。



開催後に科目一貫としてのレポートとともに学生アンケートも収集しておりますが、多くの仲間とコミュニケーションができたこと、臨床系の話なども聞き意欲が上がったこと、どのような目標を持つべきかを意識出来たことなどとても高い評価を貰っていること、さらにはイニシエーションとしては学長・理事長・医学部長の話を学生も非常によく覚えてくれていることも意義あるものであることと加えさせていただきます。この意欲を保ったまま6年間学んでくれることを願うばかりですし、それを維持し高めることも我々の務めかと考えます。

医学教育センター 臨床前教育部門
生物学 教授 武内 恒成

2018 年度から選択講座を開講

平成 30 年度から 1～3 学年次の 6 時限の枠を使って、選択講座を開講いたしました。この科目は講義・セミナー・実習等様々な授業形式で開講できるものです。また受講対象者を学年毎に限らず、1～3 学年全部を対象にすることも可能にしていますし、対象人数も特に制限は設けていないため、3 人～100 人までの様々な講座が開講されました。

開講の目的は医学教育モデル・コア・カリキュラムにある選択科目の創出と、教員が自分の教えたい科目を教えることができるように、ということが 2 大目的です。また副次的な目的としては 1 限～6 限までびっしり詰まった授業を、(学生の授業の選択の仕方によって) 時々 6 限目の授業が無いようにすることもできるということもあります。

1 枠の講座の構成は 5 コマ(各 70 分)の授業からなり、3 枠を取って選択講座の 1 単位取得となります。本年度は、前期は 1 年次は未だ選択講座は開講しておらず、また 3 年次は後期から臨床科目の系統講義が始まるために、前期のみの開講となっています。そのため、1 年次と 3 年次は 1 単位、2 年次は 2 単位の選択講座の単位の取得を求めています、また 1-3 学年が同時に参加できる講座はありません。



初年度は延べ 43 講座の提案をいただきました。これから各講座の担当者の感想や、学生からの振り返りアンケートを見て、後期の募集に向けてより充実した選択講座にしていきたいと考えています。教員の皆さまには、次年度以降さらに工夫を凝らした講座をご提案いただき、選択講座が愛知医科大学の教育の目玉になるように育てていければと考えています。

医学教育センター長
特命教授 伴 信太郎

IPE（Interprofessional Education）多職種連携教育開始

チーム医療の重要性は、医療安全の視点からはずいぶん前から言われていますが、地域包括ケアシステムの推進にあたって、さらに注目を集めています。医療現場では、

Interprofessional Work（IPW）即ち、様々な職種のプロがお互いの専門性を活かした協働をすることが求められます。そのチーム活動は、お互いの特徴や役割を知らないままでは円滑に進みません。そこで、多職種連携教育が必要です。す

でに他校では、医学部と医療関係学部との合同授業・実習が行われており、当学でもかねてからの課題となっていました。昨年、看護学部と合同のワーキンググループを設立しトライアルを行った結果、今年度から正式なカリキュラムとして、1年次、2年次、4年次で開始する運びとなり、4月16日に4年次で第1回が体育館で開催されました。医学部は「プロフェッショナリズム」の一環、看護学部は「基礎看護学」の一環として組み込みました。4年次のテーマは「チームで協働する際に必要な要件」としました。IPEの解説後、倫理的課題のあるDVDを視聴し、その後32班（1班6～7人）の医看合同のグループワークを行い、自職種の特徴、多職種の特徴、協働に必要な要件に関する学びを話し合い、発表しました。



初めての試みでしたが、医学部教務課・看護学部教学課の協力のもと、充実したグループワークを行うことができました。学生は部活動などで一緒にいることはあっても、職種としての違いに気づく機会は今までなかったので、この取り組みの経験を活かし、自他職の役割を認識できたのではないのでしょうか。この場をお借りして心から感謝申し上げます。今後、より円滑なチーム活動が行えると期待しています。

シミュレーションセンター
講師 川原 千香子

◆学会報告・実習報告

将来の職場を覗いてみよう～授業外の自主的見学～

2018年4月、今年も医学部に入学した116名の新入生と、入学すぐに開催された「プロフェッショナリズム合宿研修」で出会いました。そこで「医師」になるという大まかな夢を現実的なものに変えるため・目標を持って医学教育に望む為のモチベーションを上げるために、“将来の職場を

覗ける”機会、「授業外職場見学」を提案しました。



2日間で25名の新入生がドクターヘリコプターを見学。

ドクターヘリの役割・使命や、ドクターヘリ事業に携わる医療者以外のスタッフについてなど「多職種にわたるプロフェッショナリズム」を学びました。目をキラキラさせてやる気がみなぎる彼らの表情を目



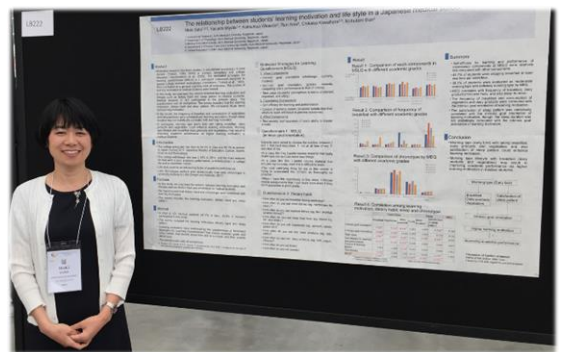
の前に、私も心が温まりました。

さらに、2 名の新入生が救急医療の現場を見学しました。彼らに救急医療を見てほしいというより、自分の将来の職場になる「医療の現場」を知ってほしいという気持ちで見学を補佐しました。医療に携わる「怖さ」を口にしていましたが、その怖さを軽減する為に勉強が必要であると感じ取ってくれたようです。今後もこのような場の提供を継続していきたいと思う所存です。

医学教育センター
講師 青木 瑠里

Experimental Biology 2018 に参加して

2018 年 4 月 21～25 日にアメリカのカリフォルニア州サンディエゴで開催された Experimental Biology 2018 に参加しました。Experimental Biology はアメリカの基礎医学系学会から組織される学会です。今回、アメリカ生理学会の教育セッションにおいて、「The relationship between students' learning motivation and life style in a Japanese medical school (日本の医科大学における学修意欲と生活習慣との関連性)」についての発表を行いました。本内容は 2017 年に本学医学部の 1 学年次から 4 学年次を対象として調査した内容をまとめたものです。学修意欲と食習慣（朝食欠食状況）、睡眠時間、クロノタイプ（朝型夜型）の関連性を検討した結果、朝型の生活リズム、朝食摂取と学修意欲は関連すること、さらに、睡眠の満足度と学修意欲にも相関があることがわかりました。この調査を継続的に実施に、経年変化を検討していきたいと考えています。



IR 室
講師 佐藤 麻紀

学長招聘講演会のご報告

5 月 29 日（火）に学長招聘講演会が下記の通り開催されました。

『アメリカへの挑戦』

共催：医学教育センター・国際交流センター

日時：平成 30 年 5 月 29 日（火）午後 6 時～

演者：小林恵一（ハワイ聖ルカ・クリニック院長）



【小林恵一先生のプロフィール】

日本の医学生への海外飛躍を熱心にサポートしている先生です。現在、日米医学医療交流財団のホームページの人気コラム「小林恵一先生の医療英語シリーズ」を連載中。（<http://janamef.jp/category/medicalenglish/>）

◆医学教育一コマ③

～クリニカル・クラークシップ（Clinical clerkship: CC） - その2～

センター長・伴 信太郎 特命教授

今回は、私が愛知医科大学メディカルクリニックの外来で実施した CC を紹介しました。今回は、病棟での CC の一例を紹介します。これは愛知医科大学の 5 年生の 1 週間の実習でも出来るやり方です（現在私は病棟診療を担当しておりませんので、このやり方は以前に川崎医科大学で行っていたものです¹）。

初日は、まず病棟に学生を連れて行って、前もって学生が担当することを承諾している患者さんに「今週 1 週間〇〇さんを担当する■■君です」と紹介し、学生が自己紹介をします。その後、学生に「カルテを見て、病歴、身体所見、検査結果を把握した上で、看護記録にも目を通しておくように」と話して、私は病棟を離れます。この時に、学生に患者の病歴を一から聞くようなことをさせてはいけません（ここが大切！）。それでは、CC になりません。その後、学生が一応前述の患者把握が終了したら、私に連絡をさせて、それまでに把握した情報をプレゼンテーションしてもらいます。その後は、毎日患者をフォローしてもらいます。

その他の注意点には、下記のような点が挙げられます¹。

1 人の学生が 1 人の患者の受け持ちになる；若い女性患者は、女子学生が受け持ちになる；訪室時間は必ず前もって患者さんと約束をする；全身のスクリーニング診察は、まとめて行わず、「今日は頭頸部」、「明日は胸部」等のように分けて行う；実習の開始、終了時、廊下で会った時などに礼を失しない（特に終了時の挨拶を忘れやすい！）；ベッドサイドでは、必ず座って話を聴く；検査などの時には、できるだけ付き添う；まだ決定していない診断・治療方針については述べてはならない。

その他、学生が担当になった時に患者さんに喜ばれること、患者さんが困ること等については、参考文献を参照していただければ幸いです。

参考文献

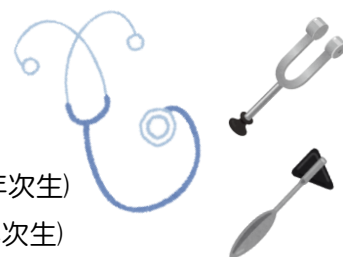
1. 伴信太郎, 他. 医学教育 25:35, 1994. doi.org/10.11307/mededjapan1970.25.35

◆医学教育センターからのご案内

～平成30年度 OSCE の日程～

平成 30 年 7 月 21 日（土） Post CC OSCE（臨床実習後 OSCE 対象：6 学年次生）

平成 30 年 9 月 29 日（土） Pre CC OSCE（臨床実習前 OSCE 対象：4 学年次生）



～平成30年度医学部 FD 開催のお知らせ～

平成 30 年 6 月 14 日（木） 医学部第 2 回 FD 17:30-19:30(予定)

平成 30 年 11 月 9 日（金） 医学部第 3 回 FD 17:30-19:00(予定)

皆さま、奮ってご参加いただきますようご案内申し上げます。